卒業論文

エヴァンゲリヲンにみる「さとり世代」の意識構造

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2018 年度入学　1LT18036T 一倉一輝

提出日　2022 年 1 月 6 日

要約

これまで様々な世代で議論されてきた若者論があるが、現代の若者に関しても同様に議論がなされている。現代の若者においては「さとり世代」というレッテルを貼られ、仕事や恋愛など多方面における消極性を揶揄されている。このようなレッテルは上述のような消極性がまさにさとりを開いたように達観したように見える様からとられたものだと語られている。しかし、ここに込められた意味としてはそのような達観したような様子を称賛するものではなく、まだ若く未熟な若者によるさとったような振舞いを批判するというものだ。ここで、本論文では現代の若者に消極性がみられるのか、また、この「さとり世代」が現代の若者にとってどのような意味を持つのかを検討することを目的としている。

はじめに、これまで消極性が取り上げられてきた団塊の世代など、消極性を持つ若者の意識構造や現代日本人の意識構造の現状についてまとめた。団塊、団塊ジュニア世代において消極性に至る要因として社会への入り口の変化、自分らしさ志向、自己能力感の 3 つが挙げられていた。自分らしさ志向と自己能力感については密接しており、自分らしさ志向が高いほど階層意識が低い傾向があり、階層意識の低さが学生においては学習外に自己能力感を見出すという傾向があった。これらの要因により、学生では学習からの逃亡など「下流」へと向かっていく流れがみられた。また、現代日本人の意識構造において注目すべき点としては、近隣住民や親戚等との人間関係の希薄化が進む一方で同僚に対しては能率よりも情緒を求めるといった矛盾した特徴を持っていた。また、職場に情緒を求めることに加え、人生における仕事を重視する考え方を持つ人が減少している。ここから、現代の日本人は仕事に対する意識というものが低下しており、その結果、職場でも能率よりも求めるという変化が生まれているといえる。

次に、実際に現代若者の意識構造について探るために大学生を対象とした聞き取り調査を行い、彼ら一人一人の事例や概要についてまとめ、考察を行った。その中でも、消極的意識構造について探るために職務の中で制約の強い公務員を志望する大学生を対象とした。彼らにおいて特徴的な点としては現状維持に努めていた点である。民間企業においてよく主張される仕事を通した成長を嫌い、先行研究の調査と同様に人生における仕事に対する重要性が薄いという消極的な一面が見えることができた一方で、就活において最重要した点はやりがいであった。これまでの仕事に対する消極的な向き合い方とは違い、仕事に積極的に取り組むように感じられるものの、聞き取り調査の中でやりがいを求める一方で、仕事

に対する制約を歓迎し仕事における自分らしさを見出すことを避けるような傾向がみられた。このように、仕事に対して消極的な向き合いかたをしている若者たちの意識構造を見ることができた。

次に、作品分析を行い若者にとって「さとり世代」というレッテルがどのような意味を持つのか再定義した。「ヱヴァンゲリヲン新劇場版：破」を取り扱い、まずは本作品の 3 名のキャラクターをとり上げ、「さとり世代」と呼ばれる若者の特徴や、これまで見てきた先行研究や聞き取り調査から見えた現代の若者の意識構造参考として基準を設け、「さとり」「さとれない」「さとった風」というタイプ分けを行った。また、この作品分析を上でこれまでの分析で見えてきた若者の消極性をふまえ「現代若者はさとりを求めている」という仮説をたてて進めていく。これらのようなキャラクターが現代社会において理想として掲げられるすべてを犠牲にして目標のために努力するという働き方を体現する使徒との戦闘を経てそれぞれのキャラクターに変化がみられた。ここで、使徒との対立は現代社会において、若者の消極性を批判し理想の姿を若者に求める社会との対立だと読み替えることができるのではないだろうか。また、3 名のキャラクターはこのような使徒を倒し「さとり」と呼べる人物像へと変化している。ここから、この理想との対立には社会において求められる理想を打破し、仮説のように「さとり」を求めているといえる。

最後に、これらの分析の結果、仮説のように現代の若者にとって「さとり世代」とは批判的にとらえるものではなく目指すべき姿だという風に再定義することができると結論付けた。「さとった風世代」と呼ばれるように、まだ「さとり」に至ることができていない若者たちが、作品分析で取り上げたキャラクターたちが理想との対立の中で懸命にもがく作品に共感し熱狂する様子からもこの仮説を支持することができる。以上を踏まえ、現代若者に対する批判的なレッテルは、彼ら自身にとっては肯定的にとらえているものである可能性を述べ、本論文の結びとする。

目次

1 はじめに 1
2 先行研究 3
2.1 「さとり世代」と呼ばれる若者たち 3
2.1.1 消極的な若者たち 3
2.1.2 コストパフォーマンスに囚われる人々 4
2.2 「下流」でいたい人々 5
2.2.1 社会への入り口の変化 5
2.2.2 自分らしさを求める人々 6
2.2.3 自己能力感の及ぼす影響 9
2.3 生活における日本人の意識構造 9
2.4 小括 14
3 調査概要 15
3.1 調査目的 15
3.2 調査対象 15
3.3 調査方法 15
3.4 調査期間と調査対象者の概要 16
3.4.1 調査対象者の事例 16
3.5 調査結果 18
3.5.1 成長への努力を嫌う人々 18
3.5.2 やりがいと仕事量 19
3.5.3 ライフコースにおける仕事の位置付け 21
3.6 小括 22
4 作品分析 23
4.1 作品分析の目的 23
4.2 作品紹介 23
4.2.1 キャラクターの概要 24
4.2.2 作品選択における時代的ギャップ 26
4.2.3 作品分析における仮説 27

4.3 キャラクターのタイプ分け 27
4.3.1 タイプ分け基準 27
4.3.2 碇シンジのタイプ分け 28
4.3.3 綾波レイのタイプ分け 31
4.3.4 式波・アスカ・ラングレーのタイプ分け 35
4.4 使徒との対立の意義 39
4.5 「さとり世代」の再定義 41
4.6 小括 42
5 結論 43